

「送り手と受け手が対話する場を」

「最」 近のテレビは面白くない」と、さまざまな場で繰り返し言われている。私たち送り手は、こうした受け手の声をどれだけ受けとめてきたのだろうか？

送り手は送りっ放し、受け手は言いっ放し。それは、送り手だけの問題なのか、それとも受け手にも問題があるのか。

フルデジタル時代を目の前にして、激変する放送業界に相応しい「批評」の姿とは？

特定の放送局に依存することなく、NPOとして市民が集まり放送を批評し続ける雑誌『GALAC』の編集長・丹羽氏に聞いた。



丹羽 美之

東京大学大学院情報学環准教授
放送批評雑誌『GALAC』編集長

プロフィール

1974年生まれ。東大法学部卒業後、1996年NHKにディレクターとして入局。退職後、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了、法政大学専任講師、同准教授を経て、08年より東京大学大学院情報学環准教授。放送批評雑誌『GALAC』の編集長も務める。

「放送」は「送りっ放し」で良いのか

当たり前のことですが、「放送」は「送りっ放し」と書きます。以前は、文字通り一方通行なメディアであったのかも知れませんが、しかし、デジタル化が進み、インターネットをはじめ、これまで受けるだけだった人たちが自ら積極的な発信を始めている時代に、テレビがいつまでも一方通行ではいられません。

テレビ界は、2011年7月24日、アナログ放送を停波し、本格的なデジタル時代に突入します。放送のデジタル化の売りのひとつは「双方向性」です。視聴者のみなさんに番組に参加していただくというのも、双方向性ですが、番組の中身についても、送り手と受け手との間で双方向性を高め、より良き番組をめざす必要はないでしょうか。

放送批評雑誌である『GALAC（ギャラク）』※1では、批評家と制作者がひとつの番組をめぐって誌上で意見を交わす「クロス批評」を企画するなど、放送番組について異なる意見を持つ人たちが対話するための空間づくりに積極的に取り組んでいます。

放送を批評する意義とは何か、なぜいま送り手と受け手が対話する場が必要なのか、そのような場をどのように作り出していけばいいのか、『GALAC』編集長を務められている東京大学大学院情報学環・准教授の丹羽美之（にわ よしゆき）さんに伺いました。

「放送批評」Ⅱ「視聴率とは異なる番組評価の仕組み」

——放送に対する「批評」とはどのようなものだと考えていますか。

番組評価の基準として視聴率がありますが、視聴率が低いからといってその番組が良くないと言い切れるものではないでしょうか。視聴率はあくまでどれだけたくさんの人に見られたかを示す指標であって、その番組の中身の良し悪しについては何も語ってくれません。もっとテレビ番組の中身について議論すること、たとえ視聴率は低くとも良い番組は良いと言っていくことが大切です。その意味で「放送批評」とは、視聴率とは異なるもう一つの番組評価の仕組みだと考えています。

いまのテレビの世界では、視聴率の取りにくい番組は制作しにくいのが実情です。そうした番組がきちんと評価されることは、制作者にとっても何らかの励みになるはずですが、とりわけ地方の民放局には、予算的にも人員的にも苦しいなかで、地域に根ざした優れた番組を作っている制作者がたくさんいます。『GALAC』で地方局制作のドキュメンタリーを精力的に取り上げているのは、地方の草の根的なジャーナリズムに対して、きちんと評価をすることが重要だと考えているからです。

——「ギャラクシー賞」※²では、ドキュメンタリーや特集番組以外にも幅広く賞の対象にされていますが。

テレビは毎日、毎日、放送される日常的なメディアです。そういう意味では、バラエティーや生ワイドなども立派なテレビ文化の一部です。だからこそ、単発のドキュメンタリーやドラマだけでなく、日常的に放送されているレギュ

ラー番組をしつかり批評することも重要だと思います。私自身はいま選考には関わっていませんが、「ギャラクシー賞」では、各選考委員がエアチェックを行い、通常では賞の対象となりにくいレギュラーのバラエティー番組などもしっかりと評価するようにしています。

緊張感をもって「褒める」

——最近、「テレビがつまらない」との声が多く聞かれますが、どのように思われていますか。

確かにそういう声をよく耳にしますね。でもそういう紋切り型の批判をしている人に限って、テレビをまともに見ている人が多いいのではないのでしょうか。テレビにはまだまだ面白い番組がたくさんあると思います。私はあえてこういう時代だからこそ、テレビを「褒める」ように心がけています。具体性に乏しい批判は制作者にも響きません。大切なのは、どんな番組が優れているのかということを引きちんと判断し、言語化し、共有していくことです。どの番組のどこが、どう良かったのかを言葉にして、制作者にフィードバックすることです。いまの放送に必要なのは、どんな番組が優れているのかということを判断するための「基準」であり、『GALAC』がこうした「基準」作りに少しでも貢献できればいいなと思っています。

誤解しないでほしいのですが、テレビを褒めるだけでなく、当然批判もします。「これが良い」と言ったその裏には、当然「これは良くない」という判断があるからです。「批評」は英語で「クリティーク (critique)」と言いますが、この言葉には「crit (切る、分ける)」という接頭辞が使われています。つまり、「批評」には「この番組を褒めるか否か」という分かれ目があるものなのです。そして、批評する側

※1「GALAC」

NPO放送批評懇談会が発行する月刊誌。地上波テレビ・ラジオから、BS、CS、CATVまで、コンテンツ、つまり番組に徹底的にこだわって放送メディアを批評している。また、どの新聞・テレビ系列にも属さず、行政からも完全に独立する放送批評懇談会の自由な立場を最大限に生かし、メディアが抱える問題を鋭くえぐるメディアの「調査報道」も実施している。

※2「ギャラクシー賞」放送批評懇談会が、日本の放送文化の質的な向上を願い、優秀番組・個人・団体を顕彰するために、1963年に創設した賞。現在は、テレビ、ラジオ、CM、報道活動の四部門制をとっている。

はどうしてそちらを選択したのか、その「基準」を常に問われることとなります。だからこそ、「批評」には緊張感が芽生えます。批評する側にこうした緊張感があればこそ、制作者にも響く批評が可能になるのではないのでしょうか。

「批評」を介した送り手と受け手の対話

——テレビの制作者は自分たちの番組が批評されることにあまり興味がないとの指摘もあります。

それは先ほど言ったように「最近のテレビは面白くない」というような毒にも薬にもならないパターン化した批評が横行していることが原因のひとつだと思います。「何がどう面白くないのか」「何をどうすれば面白くなるのか」。そうした提言もないまま、ただ批判されるだけでは、制作者側も耳を貸さなくなりそうです。その意味では批評する側にも問題があるでしょうね。

もちろん制作者の方にも問題はあります。テレビの制作



者のなかには、一度放送が済んだ番組にはあまり興味が無いという人もいます。テレビは「いま」が大事であり、過去の終わった番組をわざわざ振り返っても仕方がないというわけです。

これでは批評が次の番組制作に活かされるはずもなく、批評すること自体が非常に無意

味な活動となってしまう。放送批評がなかなか広がってこなかった背景には、こういう両者のすれ違いがあったのではないのでしょうか。

——送り手と受け手の間にある種の「溝」があるということでしょうか。

そうですね。「溝」があるからこそ、送り手と受け手が一緒にあって「良い番組って何だろう」と考え、その溝を埋めるための仕組みを作っていくことが必要だと思います。送り手と受け手が対話する場が、できれば顔を突き合わせて議論する場が、これからの放送にはもっと必要だと考えています。『GALAC』の09年4月号で「クロス批評」を試みたのも、送り手と受け手の対話の場を少しでも増やしたいと考えたからです。

——これまでお互いの顔が見えていなかったと。

送り手にとって顔の見える受け手と言えば、上司や同僚、自分の家族くらいしかいないのが実情ではないでしょうか。もちろん送り手は視聴率というデータから視聴者の姿を想像することはできます。しかし、そうした数字だけでは、どんな関心から番組を見てくれているのか、番組を見てどんなことを感じたのか、ということまではわかりません。具体的な顔の見えない視聴者に向けて番組を作らなければならぬという意味で、テレビの送り手は孤独です。

そして今、NHKも民放も制作現場が多忙を極め、家に帰る間もなく働いています。職場内での議論も減ってきていると聞いています。自分の作った番組について率直な意見を聞く場はますます減ってきているのではないのでしょうか。お互いに何を考えているのかをもっとよく知るために、

送り手と受け手が顔を突き合わせて議論する場が必要だと思います。相互に理解が深まれば、送り手側は次の番組制作に活かせますし、受け手側ももっと生きた批評ができるようになる、そうした相乗効果も期待できます。

『テレビの、これから』をレギュラーに！

——NHKで放送した『テレビの、これから』^{※3}もそうした対話の場にあたるでしょうか。

『テレビの、これから』は、送り手と受け手の対話の場として画期的な番組だったと思います。視聴者の声を聴くというコンセプトでは他にも『3つのたまご』^{※4}という番組がNHKにはありますが、『テレビの、これから』はそれとは全く違う対話の空間を作り出していました。あのように入聴者が自由にテレビで意見を表明できる場、それもテレビについて制作者と語り合うことができる場は、非常に貴重なものだったと思います。

ただ、初めての試みだけに必要以上に構えてしまったためか、視聴者側も、制作者側もどこかで聞いたことのあるような批判や応答にとどまっていたと感じました。しかし、こうした議論は、回数を重ねることによってブラッシュアップされるはずで、対話の仕方が分かってくれば、もっと上手な議論になっていきます。こうした送り手と受け手の対話の試みを、今回だけで終わりにせずに、ぜひ今後も続けていってほしいと思います。

送り手と受け手が対話できる場が、テレビ番組のなかや『GALAC』のような雑誌、あるいは番組を一緒に見て語り合うイベントなど、さまざまなかたちで広がっていけば、少しずつ溝も埋まり、互いに歩み寄ることができるはずです。そうなれば、送り手は送りっ放し、受け手は言いっ放しと

いう状況から少しは脱却できるかもしれません。テレビに対する批評がもっと活発に行われ、それらが制作の現場にうまくフィードバックされるような仕組みを作り出していく必要があると思います。デジタル時代のテレビに求められているのは、そのような意味での双方向性なのではないでしょうか。

インタビューを終えて

NHKでは視聴者の声を拾い上げ、現場にフィードバックする仕組みがさまざまな形で実施されています。相互の直接対話の機会としては「ふれあいミーティング」なども実施しています。しかし、こうした既存の取り組みだけでは十分だったのかと問われれば、残念ながら疑問を抱かざるを得ません。

送り手・受け手双方の意見・主張を循環させていくためには、経営計画に掲げた「視聴者のみなさまの声を経営に反映させる回路をさらに充実」させるためには、どのような取り組み・仕組みが必要なのか、現場を巻き込んだ議論が必要だと感じました。

報告 中央放送部長 中村重治

※3 『テレビの、これから』
09年3月21日放送。視聴者参加型の討論番組『日本』の、これから』の放送記念日特集として『テレビ』を議題に取り上げた。民放各局の人気番組のフロデューサー・ディレクターも出演した。

※4 『3つのたまご』
前身の『あなたとNHK』を、さらに視聴者との双方向性を重視し、パワーアップし、NHKのさまざまな取り組みについて現場の担当者の声を交えて紹介するものとして、経営情報などについても分かりやすく伝えていく番組。